

ロックとリードによる懷疑主義批判

— プラグマティズム的観点から

戸 田 剛 文

序

ジョン・ロックは、いわゆるイギリス経験論の創始者とも言える哲学者であり、彼に続くバークリやヒュームは、ロックの哲学をそれぞれ引き受けながら、同時にそれを批判する形で、形成されたものであると言える。もちろん、ロックもまた、デカルト哲学の批判的受容やニュートンやロバート・ボイルといった当時の偉大な自然科学者の影響のもとに生まれたものであることは言うまでもないことであろうが、ひとつの古典的な哲学史の理解として（それが正しいものであるかどうかはともかく）、ロックのような経験論を論理的に徹底したものがヒュームよって懷疑主義へとたたらされたというものがある。そして、その懷疑主義に衝撃を受けて、その克服に乗り出したのがカントであるということが、しばしば言われてきた。しかし、ヒュームによつて、そのような「独

断のまどろみ」から目覚めさせられたのは、カントだけではない。20世紀初頭の古典的プラグマティストであるパースや、さらにのちの偉大な哲学者であるチザムなど、高い評価を与える哲学者はいつつも、それほど十分に注目されていたとは言えない哲学者トマス・リードもまた、やはりヒュームによつて大きな思想的転向を迫られた哲学者である。しかも、ロックのような観念説が、その論理的な帰結としてヒュームにおいて懷疑論に至るという筋道を明確に描いたのもまたリードであった。

こうしてわれわれは、デカルトとロックが、その行き先をしることなく、懷疑主義に至る道を進んでいるのがわかる。しかし、彼らには、さらに進むための明かりの欠如のために、立ち止まった。バークリは、恐ろしい、断崖絶壁が現れるのに恐れ、脇にそれ、それを避けた。

しかし、『人間本性論』の作者は、より大胆で恐れ知らずにも、ヴェルギリウスのアレクトーのように、直接に深い深淵へと向かつていくのである(一)。

リードは、しばしばこのような描写を繰り返す。ヒュームの懐疑主義が生じたのは、リードによれば、バークリやヒュームが、何か論理的な誤りを犯したわけではない。すでに、観念説が採用されたときに、この結果へと哲学者たちは向かっていたのである。それゆえリードは、必然的に、観念説そのもののへの批判を展開する古ことになる。また、観念説の代表者として、ロックは非常にしばしばリードの考察の対象となる。実際に、『人間知性論』などでは、ロックの名前自体は、リードの哲学の生みの親とも言えるヒュームの名前よりも多く登場するくらいである。

リードとロックの比較を含む研究は非常に多い。人格の同一性と一次性質と二次性質の区別なども、両者の違いを示すものとしてしばしば取り上げられる(二)。しかし、やはり一つ大きな問題として考えられるのは、知覚に関わる問題であろう。というのも、ヒュームを懐疑主義だと考えるようになる解釈の背景として、観念説が基本的には知覚表象説と強く結びついているからである。そのことは、リード自信が非常に意識していたことである。リードによれば、ロックの知覚表象説は、外界の存在を証明できない。それゆえ、バークリは、物質世界を消去した。しかし、ロックの知覚表象説は、精神の存在も論証できない。それゆえ、ヒュームは、バーク

リの議論をさらに推し進めて、精神的な実体の存在も否定することになったのである。

それに対して、リードは、われわれが外的な対象を直接知覚するという主張を展開している。この論文では、この問題については深く立ち入らないが、リードの直接知覚をめぐる問題は、リード研究においても非常に難しい問題の一つであり、リードのその理論が、ロックを始めとする観念説者に対してうまく機能しうるかどうか自体が、難しい問題であると言える。というのも、リードの知覚は、ロックが言うような観念の知覚に対応するものであったり、ラッセルの言うような直知のような、たんなる現象の知覚とは大きく異なるものであるからだ。

この問題に立ち入ることなく、むしろ本論文では、懐疑主義をめぐる両者の類似性に着目したい。直接知覚・間接知覚という観点からではなく、むしろ、両者の知覚に関する主張の違いにもかかわらず、両者をともに懐疑主義から切り離す、世界設定そのものの類似性に注目するのである。ここに来てやや抽象的になりすぎた感じがあるので、具体的な議論に急いで移行することにしよう。

一．外界の存在——ロックの場合

ロックは、『人間知性論』の第四巻の第一章で、知識は観念の一致・不一致にあると述べるが、その一致・不一致を表すものとして、一．同一性・差異性、二．関係、三．共存あるいは必然的結合、四．実在の四つをあげている。そして、

続く第二章で、知識の確実性の程度について論じているが、そこでロックは、われわれの知識には三つの確実性の程度があることを論じ、それを直観的、論証的、感覚的として分類し、同時にこの順に、確実性の程度に違いがあると論じている。(4.2.14) そしてこの、感覚的な知識とは、まさしく実在の一致の近くにほかならない。

しかし、それら三つは、たんなる程度の違いを表しているようにには思えない。というのも、直観的な知識と論証的な知識の確実性の違いは、われわれの心理的能力によるものであり、論理的にはいずれも絶対的な確実性に到達しうるものだからである。ロックによれば、なぜ論証的な知識が直観的な知識に確実性で劣るかといえば、それが観念間の一致・不一致の知覚の間に、多くの他の観念間の一致・不一致が介在するために、われわれの記憶力の問題などによって、確実性が劣るからである。

感覚的な知識は、つまり実在についての知識は、これらとは大きく質を異にすると思われる。ロックはこの感覚的知識を他の二つと対比させつつ、次のように述べている。

実を言うと、私たちの外の有限な存在物の個々の存在に携わる、心の別の知覚があつて、この知覚はたんなる蓋然性を超え、しかも、前述の程度の絶対確実性のどちらにも完全には達しないが、知識の名の下に通用するのである。(4.2.14)

しかし、このロックの主張には問題がある。それは、ロックがここで感覚的知識が完全な確実性に至らないことを認めながらも、それにもかかわらず知識と呼べるのはなぜかという問題である。その点について見てみることにしよう(3)。

外的事物についてのわれわれの知識は、次の二つに分けられると思う。一つには、ある外的事物 X の存在に関わる知識であり、もう一つは、その外的事物 X が何か、つまりその本質に関わる知識である。上で見たように、ロックは、X の存在をわれわれが知識として持てることを認めているが、X の本質についてはそれを認めない。というのも、われわれは、X を構成する粒子がどのような性質を持っているのかということに関して知識を持つことができないからである。なぜなら、ロックにとつて、X を構成する粒子の性質は、われわれの心の外に存在するものであり、われわれがアクセスすることができないものだからである。われわれは X の複雑観念を利用してある程度 X の性質について知ることができる。X を構成する粒子自体が持っている性質をロックは実在的性質と言ひ、X の観念を通して観察できる性質を唯名的本質と言う。そしてロックの知覚表象説の構造によつて、われわれがアクセスできる唯名的本質は、われわれがアクセスすることができない実在的本質に基づいている。ここで、この用語を用いて、今の問題を言い換えるならば、唯名的本質をいくらわれわれが発見したとしても、実在的本質についてわれわれが知識を持てない以上、X の唯名的本質についての知識もまた完全性に達することはない。ロックは、

この問題を取り上げるときに、しばしば金を引き合いに出して説明する。

例えば、われわれは、黄色の色を見て、実験することによって、一片の金に、重さ、可鍛性、可溶性、固形性が合わさっているのを見るが、これらの観念のどれ一つとして、他の観念への明確な依存性や必然的な結合を持つていないので、われわれは、これらの中の四つがあるところでは、第五のものも必ずあるかどうかを、たとえその蓋然性がどれ程高いものであろうとも、確実に知ることができないのである。(4.3.14)

このように、ロックは外的な存在がどのようなものかについての確実な知識を得られることを否定している。しかし、その一方で、先ほど見たように、外的な存在については、それが確実性に達することはできないとしながらも、それを知識のもとに含めようと努力している。では、ロックはどのようにしてそれを行おうとしているのだろうか。思うに、ロックはこの点について二通りの正当化を行おうとしているように思われる。一つは、想像の観念と感覚の観念の違いに基づくものであり、その議論は、われわれの生活における実践にかかわるものである。もう一つは、ロックの観念説の枠組みに基づくものであり(4.4.4)、単純観念の生成が手掛かりとされる。それぞれの議論は、本論文において重要なものであるので、もう少し詳細に見ていくことにしよう。

二. 外的事物に関する知識の実在性について

ロックは、すでに引用した第四卷二章一四節の引用箇所の後で、次のように述べている。

私は、誰でもよいから次のことを尋ねたい。それは、日中に太陽を見るとときと、夜に太陽について考えるとき、そして現実ニガヨモギを味わったり、薔薇の香りをかぐときと、それらの味わいや香りについてただ考えるときに、それらの知覚が異なることを打ち負かしがたく意識しないかどうかということである。われわれは、われわれ自身の記憶によって心の中に再現される観念と、感官によって心の中に現実に入ってくる観念の間に違いがあることを、あらゆる二つの異なる観念の間にある違いを見出すように、見出すだろう。(4.2.14)

もちろん、この議論は、たとえ夢であっても現実の知覚と同じようにわれわれが知覚の対象を実在しているものとして考える可能性があることを排除しないし、またそれに基づいた反論を受ける可能性がある。ロック自身そのことに気づいており、ロックはその可能性に対して再反論を行う。ロックによれば、現実の対象の知覚はしばしば快苦を伴い、その快苦の知覚は絶対確実であるのだが、その確実性こそ、われわれの幸福や悲惨さにとって十分なものであり、それを超えてはわれわれは関心を持つことはないということである。この

ロックの言葉は、われわれが実際に生きる上での実践性をはるかに超えるたんなる論理的な懷疑主義は、退けられる、あるいはロックが相手にするものではないということを意味しているように思われる。

もう一つのロックによる観念の實在に関する知識についての議論を見てみよう。まずロックは、われわれの知識の實在性について次のような疑問を自ら立てる。

われわれの知識は、われわれの観念と事物の實在性の間に一致がある限りにおいてのみ、實在的である。しかし、その基準とはいったい何だろうか。心は、それ自身の観念以外に何も知覚しないとき、どのようにして観念が事物それ自体と一致することを知るのでろうか。(4.4.3)

そしてこれに対して次のような回答を与えている。

第一に、最初のものは単純観念であり、これらの単純観念は、すでに示されたように、心が自分自身に作ることで決してできないので、必然的に、事物が自然な方法で心に働きかけ、われわれの創造主の英知と意思によって規定され適合されている知覚を心に生み出す事物の産物でなければならない。そこから次のようになるだろう。単純観念は、われわれの空想の生み出す虚構ではなく、われわれに實在的に働きかける、われわれの外にある事

物の自然で規則的な産物なのである。そしてそれらの事物は、意図された、そしてわれわれの状態が要求するすべての一致をもたらすのである。(4.4.4)

つまり、ロックによれば、われわれが持つ単純観念は、われわれが自由に生み出すことができないものである以上、われわれの心の外に存在する事物によって生み出されなければならない。しかし、このロックの主張は、のちにバークリによって批判されることになる。というのも、われわれの心の外に物質が存在することを否定するバークリにとっては、このようなロックの主張は、外界についてのわれわれの知識が實在的であることを示す論拠とはなりえない。いやむしろ循環論法のように見えるのである。というのも、ロックのこの議論が成り立つためには、まずわれわれの心の外に物質が存在することが前提されていないなければならない。それと同時に、それらの物質がわれわれの心に何らかの仕方で作作用することによって、われわれの心の中に観念が生み出されることもまた、われわれは認めておく必要がある。しかし、バークリはそういった前提そのものを認めることに合理的な根拠がない、あるいは不合理であると主張していたのである。

私はここで、バークリによるロック批判について詳細に立ち入るつもりはない。しかし、バークリによるロック批判は、むしろロックの認識論の特徴を改めてわれわれに示唆してくれる。それは、ロックは、われわれの心の外に物質が存在することを論証しようとしたのではないかというこ

とである。むしろロックにとつて、われわれの心の外に物質が存在すること、それらとわれわれの心の相互作用によつて外界についての表象が生まれること、これらをロックは初めから引き受けて議論していると思われるべきではないだろうか。むしろ、そのような前提をすることが妥当なのかどうか（あるいは哲学的に魅力的なのかどうか）という問題はさておき、そのように考えるならば、ロックによるこれらの前提は、論証されたり正当化されたりするものの内容ではなく、むしろ枠組みを形成するものである。何かを正当化したり、示したりするためには、常に何らかのそれらの行為を可能にする枠組みのもとでなされなければならないのであつて、それら枠組み自体は、正当化の対象ではない。もちろんその枠組み自体を正当化するための別のより大きな枠組みを考えることは可能だろう。しかし、少なくともここでロックはそのようなよりメタな枠組みを論じようとしているようには思えない。

もちろん、ロックのここでの論の進め方に問題がないというつもりはない。というのも、ロックは、先ほど引用した個所で述べているように、「観念と事物の实在性の間にある一致の」「基準とはいつた何であらうか」と問いを立て、それを正当化するために、単純観念がわれわれ以外の外的な事物によつて生み出されるように述べているからである。しかし、もし今私が述べたように、ロックの議論がはじめから粒子仮説およびその内容、つまり、粒子からなる物質によつてわれわれの心の中に観念が生み出されるという枠組みを引き

受けて始めているものであるならば、そのことは（その枠組みの中では）自明なものなのである。

まとめると、バークリが批判し、やがてリードが受け継いだような、ロックの立場は外的な存在に対する懷疑論になるのではないかという批判は、ロックにおいては生じないことになる。ロックは単純に、外的な物質の存在を前提しているだけなのである。

三、リードの場合

われわれは、前節でロックにしばしば着せられる懷疑論が、ロックが論じようとしていることとずれていることを見てきた。ここで次にリードの枠組みに目を転じることにしてみよう。

リードは、ロックのような知覚表象説は観念説の典型であり、そのような知覚理論を採用するならば、われわれはバークリを経由してヒュームへと至る懷疑論へ一本道を歩むことになると考えた。リードがこのように考えたのは、やはり、前節で取り上げように、もしわれわれが心の中の観念しか知覚しないのならば、どのようにして外的な存在が保証されるのかという問題を、バークリがロックを批判したようにリードも受け止めたからである。事実、さきほど取り上げたロックの『人間知性論』第四巻第四章の部分をリード自身も注目し、さらに次のように述べている。

われわれは、ロック氏がデカルトと同じく、次のこと

に気づいていたことがわかる。それは、観念の学説によつて、われわれの外の物質的世界の存在が証明されなければならなくなるだけでなく、同時にそれが困難になるということである。なぜなら、その学説によれば、心は観念の世界それ自体以外には、何も知覚しないからである。デカルトだけでなく、マールブランシュやアルノー、そしてノリスもまた、この困難に気づいていて、それを取り除くように試みたのだが、ほとんど成功しなかったのである。ロック氏も同じことを試みた。しかし、彼の議論は不十分なものである。(EIP 128)

その結果として、リードが採用したのは、間接知覚、いわゆる知覚表象説をとることではなく、われわれは外界を直接知覚するという直接実在論を採用することだった。リードは知覚について次のように述べている。

もしわれわれが、われわれが感官の外的対象の知覚と呼ぶ心の働きについて注意するならば、われわれは、そこに次の三つのものを見出すだろう。第一に、知覚される対象のなんらかの概念あるいは思念。第二に、それが現在存在していることについての強い、抗しがたい確信と信念。そして第三に、この確信と信念が直接的で推論の結果ではないということ。(EIP 96)

ここでリードは知覚の直接性を述べているが、さらに知覚

された外的対象の存在の信念について次のように言う。

知覚において、われわれは、大なり小なり知覚される対象の判明な思念をもっているだけでなく、その存在についての抵抗しがたい確信と信念をもっている。このことは、それを知覚していることをわれわれが確信しているときはいつもそうなのである。対象を知覚しているのかどうか疑ってしまうほど弱々しくはつきりとしなない知覚があるかもしれない。(中略)しかし、知覚がある程度はつきりとして安定するとき、その知覚が本当のものであることについて疑いは残らない。そして、知覚が本当のものであることが確かめられるとき、知覚される対象の存在はもはや疑えないのである。(EIP 97)⁽⁴⁾

リードのこの主張が、知覚された外的存在の正当化と関連付けられていることは次の言葉からうかがい知ることができる。

ひと言で言えば、知覚とは、感官によつて外的な対象について持つ証拠に、最も適切に適用されるのである。(EIP 23)

しかし、なぜリードは外的事物の存在について、このように強く主張することができるのだろうか。われわれが何かを知覚したとき、例えばわれわれがテレビを知覚して、そのテ

レビがわれわれの目の前に存在すると強く確信したとしても、その確信がテレビの存在を正当化するとと言えるのだろうか⁽⁵⁾。もしかしたらリードは次のように言うかもしれない。それこそがわれわれの「知覚」という言葉の使い方であると。そしてこれまでに引用してきた箇所からして、リードの主張はそうであろう。そのとき、われわれはリードの知覚に関する主張を、次のように定式化することができる。

われわれが外的存在である物体Xを知覚するということができるのは、

(1) 物体Xが存在し

(2) われわれが感覚器官を用いたときにその存在についての概念と信念を持つときである。

しかし、(1)を主張できる根拠は何であろうか。先ほど引用した箇所が示すように、「知覚とは、感官によって外的な対象について持つ証拠に、最も適切に適用されるのである」ということから、もしもリードがわれわれが物体Xを知覚するからというのなら、それが循環論法であることは明らかである。われわれがXを知覚していると言えるのは、Xが存在しているからであると同時に、Xが存在していると言えるためには、われわれはXを知覚していなければならぬいからである。

このように問題を考えるならば、リードの立場は、懷疑論者として批判されたロックの立場ときわめてよく似ている。

そしてこれはデカルトが感覚的な信念を方法的懐疑の過程の中で、知識としては認めなかった状況を反映している。われわれが想像の観念のように、明らかに自らが生み出した観念ではないものを知覚していて、それがわれわれの心の外に存在していると信じたとしても、どのようにしてその観念に対応するものが心の外に存在していると言えるのかということが、ロックに対して突きつけられた問題であった。デカルトは物体の観念の知覚と、それに対応するものが存在しているという確信が、その物体の存在を知覚してみなすには不十分だと考えたのだ。これはリードについても言えるだろう。われわれが物体についての抗しがたい信念をもったとしても、その信念が誤っていることはありうるのではないかと。ではリードはどのようにこの問題を考えているのだろうか。その回答を、われわれはリード自身の議論の中に見ることができ。

四. 第一原理としての常識

前節で、ロックにおいて、外的事物の本質については、われわれは知識を持つことができないとロックが述べていることを見たが、実はリードについてもそれは同じである。本論文の序で述べたように、リードがロックから影響を受けていると考えられる議論の一つとして、一次性質と二次性質の区別があることを述べた。ロックにとって、外的事物の本質は一次性質にあたるので、われわれは外的事物の一次性質について確実な知識を持つことはできない。しかし、リードは、

その区別を別の仕方で論じ、われわれは外的事物の一次性質についての直接的で判明な思念を持つことができないが、二次性質については、われわれは判明な思念を持つことができるのである。

われわれの感官は、われわれに一次性質についての直接的で判明な思念を与え、一次性質がそれ自体においてどのようなものであるのかをわれわれに知らせてくれるということである。しかし、二次性質については、われわれの感官は、われわれに相關的で曖昧な思念しか与えてくれない。それらはわれわれに、それらがある仕方であれわれに作用する性質であること、つまり、われわれにある感覚を生み出す性質だということを知らせるだけである。だが、それら自体がどのようなものであるのかについて、われわれの感覚は、われわれを暗闇に置き去りにするのである(EIP 201)

この違いはあれども、リードが外的事物の性質について、そのすべてをわれわれが知識として持つことはできないと考えていることは明らかである。この点においても、リードとロックはよく似た態度をとっている。外的事物の性質について知識を持つことができないということは、懐疑論を退けるうえでの最重要課題ではないということである。では、外的事物の存在についてはどうであろうか。

リードは、われわれの知識が第一原理に基づかなければならないと主張し、その点で彼もまた基礎づけ主義者であると言つてよい⁶⁰。しかし、リードは、その第一原理をデカルトのように一つの原理に収束できるとは考えていなかった。彼はわれわれの推論のもととなる第一原理として多くのものを挙げるが、大別すると、それは必然的な原理と偶然的な原理に分類することができる。偶然的な原理は、その性質によって絶対的に真というわけではないが、われわれの本性上、われわれがその正しさを把握できるような判断力によって真とされる。ここにリードの有名な常識の原理がかかわる。リードは次のように言う。

人を、生活の行為において共通の分別を持って活動できるようにする同じ程度の知性は、自明でその人が判明に把握する問題において正しいものと誤っているものを発見できるようにするのである。

すべての知識とすべての学問は、自明な原理の上に建てられなければならない。そしてそのような原理について、常識あるすべての人々は、それらについて判明に考えるとき有能な判定者なのである。ここから、議論はかなり頻繁に、常識に訴えることによって終わるということになるのである。(EIP 426)

そして、その偶然的な原理の一つとして、彼は次のようなものを挙げる。

もう一つの第一原理は、われわれが感官によつて判明に知覚するものは実際に存在し、われわれがそのようなものだと知覚するようなものだということである。(EIP 476)

リードは、われわれが判明に知覚するものが実際に存在することを偶然的なものではあるが第一原理として挙げている。リードにとつて第一原理とは、ほかの哲学者と同様、そこにほかの多くの議論がよつて立つ土台となるものであり、いわばわれわれの知識を構成する枠組みとなるものである。デカルトは、われわれの知識のそのような土台となるものは、絶対的に確実なものでなければならなかった。そのために、デカルトは方法的懐疑を行ったのであった。しかし、リードはそのような土台がすべて確実なものでなければならぬとは考えていない。それゆえ、第一原理の多くのものを偶然的なものとして分類したのである。それらは絶対的なものではないがゆえに、場合によつては訂正可能なものである。われわれはあるものを第一原理として受け入れるときに、それに対して慎重でなければならぬ。しかし、そこに疑いを向ける(緩やかな意味で)合理的な理由がないときに、われわれはそれを第一原理として認めることができるのである。

もしもわれわれが知覚するものが実際に存在することが第一原理として認められるならば、われわれが何か外的な物体を知覚するときにその存在についての抗しがたい信念を持つ

ということと、そのような知覚が知覚の対象である物体の存在の証拠となるというリードの主張は、むしろ知覚対象の存在の正当化のための議論ではなく、むしろそれ自体がほとんど第一原理の言い換えといつてもいいようなものであるように思える。リードの直接知覚による懐疑論の批判は、むしろその直接性というよりも、知覚論が組み込まれている第一原理によつて機能しているのである。しかし、リードの直接實在論がまったく機能しないかというところというわけではない。その点を見てもみることにしよう。

ここで再び、私はロックの次のような言葉を取り上げたい。ロックは次のように述べている。

もしもわれわれが、われわれの機能が正しく働き、その機能に作用する対象の存在について正しく情報を与えてくれるということを確認するならば、それは誤った根拠に基づいた自身であるということにはならないだろうというのも、どのような人も、その人が見たり触ったりする事物の存在を確かなものとは思わないほど、本気で懐疑的であることはできないだろうと思う。(B4716)

この言葉は、さきほど引用した個所でリードが偶然的な第一原理の一つとしてあげた言葉に似ている。もちろん、ここでロックが言う「見たり触ったりする事物の存在」を、外的な事物だと考えることもできる。なぜなら、同じ引用個所で「その機能に作用する対象」と述べているからである。しかし、

ロックの公式見解によれば、われわれの知覚の対象は、あくまでも心の中の観念である。となると、ロックがここで言っているのは、われわれが知覚している観念の存在だということになる。つまり、のちにG. E. ムーアが述べたように、感覺与件のようなものが確実に存在すると言っていることになる。となるとやはり構造としては、ロックは知覚表象説を採用するものとして、本気で懷疑的になることができないのは、観念の存在にとどまることになる。(ただし繰り返しになるが、これまで私が述べてきたように、ロックが粒子仮説及びそれに結び付いた知覚表象説を彼の認識論の枠組みとして採用しているという点を考えるならば、間接的に、外的事物が生み出す観念の存在に対する確信は、その外的事物の確信へと結びつくだろう。)しかし、リードは、直接知覚の理論を採用することによって、「その人が見たり触ったりする事物の存在を確かなものだとは思わないほど、本気で懷疑的であることはできない」ということを、直接的に、外的事物の存在に関するわれわれの確認について述べたものとして読めることになる。この違いはささやかなものかもしれないが、外的事物の存在に対する懷疑論をロック以上に重要な問題であると考えたリードにとっては、重要なポイントとなるであろう。また、この説の最初で取り上げた、一次性質と二次性質にかかわるロックとリードの違いも、リードの考えをよく反映していると思われる。物体の一次性質とされる形や大きさ、重さなどは、二次性質よりもはるかに物体の存在そのものにかかわる。それゆえ、一次性質についてわれわれが判明な思

念を持つことができるという主張は、リードにとって大きな意味を持つと言えるだろう。

結論として プラグマティズムへ

私はこれまで、ロックとリードの認識論的枠組みの類似について述べてきた。両者に共通するものは、すでに何らかの實在に関する前提のもとに認識論を組み立てているということである。両者にとつて外的事物の存在は、基本的には前提されている。もちろん、このことが、個々の場面において、何らかの正当化が試みられる必要があることまでも排除するわけではない。例えば、錯覚や幻覚のような場面において、われわれが知覚しているものが本当に存在するのかどうかは疑われてもよいし、疑われるべきだろう。しかし、外的事物が一般的に存在することは、両者にとつては議論の前提であり、その全体的な懷疑は意味をなさない。ここには、両者の実践的な態度を重要視する立場も大いに反映されているだろう。ロックの認識論の枠組みは当時の粒子仮説であり、リードにとつてはわれわれが基本的に疑うことができないと彼が考えた常識的な態度という違いはあるかもしれない。しかし、この違いも実際のところそれほど大きなものではないと考えられることもできる。というのも、ロックが粒子仮説を採用した背景には、この考えが当時十分に正しいものとして受け入れられてきたともいえ、それはある種の常識的な枠組みであったと言えるかもしれないからである。

ここで私は、19世紀後半に活躍したアメリカのプラグマ

Derek R. Brookes(ed.), Pennsylvania, Pennsylvania State University Press. (論文中では (EIP 頁数) で引用個所を示す。
Weinberg, Shelley, 2013, "Locke's Reply to the Skeptic," *Pacific Philosophical Quarterly*, 94, pp. 389-420.

註

- (1) Reid, *Inquiry*, p. 213.
- (2) 一次性質と二次性質をめぐるリードとロックの違いなどを論じたものとしては次のようなものがある。Ryan Nichols(2008), Lehrer(1978), McKirrick(2002).
- (3) ロックによる感覚的知識をめぐる問題についてはこれまで多くの研究がある。Weinberg(2013), p. 410 n9, p.413 n25 で取り上げられている文献などを参照。
- (4) 「対象を知覚している人は、それが存在していて、彼がそれを判明に知覚しているものであることを信じている。そして、そのような判断を避けることは彼の能力のうちにはない。」(EIP 409)
- (5) ワインバークは、ロックによる感覚的知識は、心理的現実性を持つが、反省的現実性を持たないことを論じているが、リードについてもそれは言えるであろう。
- (6) リードは、推論に基づくすべての知識は、それ自体自明である命題に基づかなければならないと主張する。(八章三節)
- (7) 「第一原理の中には、確実な結論を生み出すものもあれば、最も高い蓋然性から最も低い蓋然性のものまで、さまざまな程度で蓋然的なものを生み出すものもある」(第八章

第二節

- (8) Collected Papers of Charles Sanders Peirce, vol. V-VI, Charles Hartshorne and Paul Weiss(eds), Cambridge, The Belknap Press of Harvard University Press, 1974, p. 136.
- (9) Baumann, 1999.